

発行所
天理教笠岡大教会

かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
(0865)

電話 66-1311
FAX 66-1314

かさおか



一年間を通しておちばを賑やかにしよう

1. 毎月一千人のおちばがえり
1. 五十万軒にをいがけとおさづけの取次

立教169年
11月号

を、やの声を受けてこそ

秋季大祭講話 · · · 大教会長様

教祖百二十年祭の年も仕上げの句を迎えましたが、次の塚に向かつての歩み出しを遅れないように進めるため、十月二十六日には両統領が更迭されます。

本年仕上げの句、次の塚に向かつての歩み出しの句に当って、思うところをお取り次ぎいたします。

毎月一千人おぢばがえりということで歩んで参りました。一千人を大きく上回る月もあれば、届かなかった月もあります。これは一つの結果であって、できたから良い、できなかったから悪いということではなく、それに向かつてどのようにつとめてきたかを改めて振り返り、次の塚に向かつてどういう心でつとめるかということについて話を進めます。

●いかにして道が始まったか

教典第一章「おやさま」に

「我は元の神・実の神である。· · · (中略) · · ·」とは、親神天理王命が、教祖中山

みきの口を通して仰せになった最初の言葉である。

と記されています。

天理教は、「我は元の神・実の神である」という一言から始まったのですが、続いて、

· · · (中略) · · · 遂に、あらゆる人間思案を

断ち、一家の都合を捨てて、仰せのままに順う旨を対えた。

時に、天保九年十月二十六日、天理教は、ここに始まる。

とあります。

親神様のお言葉があったのはこれより三日前の

二十三日、それから三日三晩、夫・善兵衛様・家族

親族が集まって練り合い・談じ合いを重ね、善兵

衛様が意を決して「みきを差し上げます」とお答えになったのが、

天保九年十月二十六日の朝八時

頃、ということでした。つまり、善

兵衛様のその一言によって、この

道は始まったということでした。

●親から始めたのではない

既に、充分の御守護をくださっていた親神様ですが、いよいよ世界だすけを始めるという段階では勝手に始められない、私たち子



どもの方からの「どうぞお願いします」という初声を受けなければ、親神様としてははたらくことができなかった。だからこそ、どうしても承知をさせるしかなかったということではないでしょうか。

改めて考えてみれば、私たちの思いを無視して、神様が一方的にはたらくても本当のたすかりにはならなかったからでしょう。

単なる身上だすけだけなら如何様にもたすけることはできるが、自由を許している心をたすけて、陽気ぐらしに建て替えていくためには、私たち一人ひとりの心そのものを変えていくしか方法がありません。その心を変えていくには、親神様が無理矢理変えるわけにはいかない、私たちが「変えます」という決意を現わさなければ、変わらないわけです。

だからこそ、無理でも承知をさせなければならなかった。私たちの承知の上で、親神様が世界だすけにかからなければ、本当の私たちのたすかりにはならなかった、ということこそが親神様の思いだったのであるのでしょうか。

●すべて「子が受ける」ところから始まる

改めて考えてみれば、人間創造の時も、元一日も同じ理であります。教典にも、寄せられた道具を承知をさせて貰うけた、をやの理を受けた一つの姿があります。

明治二十年も同じ理であります。「扉開いてろっくの地にしようか、扉閉めて・・・」と、親神様からお尋ねがあった。それに「扉開いて」と言うお返事をなされた。その結果、教祖御身お隠しであった。ここでもやはり、私たちに承知をさせて、その理を貰い受けてはたらいておられるのであります。

突き詰めて考えれば、私たちの信仰の元一日もそうではないでしょうか。初席は旅行がてらの人もあるかも知れません。しかし、最終的にはおさづけを戴きますという自分の決意がなければ、用木にはなれなかったのではないのでしょうか。



●子が受けるからをやがはたらく

これらの共通点を考えてみれば、実は全て、私たちがをやの理を受けたところから始まっているということ、この点を、改めて、お互いに思案をしなければなりません。

つまり、親神様がはたらいてくださるのは、私たちの心通りなのです。「さあ、どうや」と、句々に掛けていただくをやの声に対して、「はい、わかりました。つとめさせて貰います」と受けた心に親神様が働いてくださる。つまり私たちは、をやの理を受けなければ親神様から御守護を頂戴できないということではないでしょうか。

●子はどのように受けているのか

そうしたときに、今度は、私たちは、そのをやの思いに対してどういう受け方をしているかという問題であります。

親神様の御守護は願い通りではなく、心通りと仰せいただきます。つまり、「受ける心」通りです。

「二年間を通しておぢばを賑やかにしてほしい」とをやの声を掛けていただきました。

その声に応えるべく、「毎月一千人おぢばがえり」を打ち出し、教会長さん方には「一教会毎月十名おぢばがえり」したらこの一千人はできるという声を掛けました。

これは大教会の勝手な思いではなく、おぢばの理を受けての声掛けですから、正しくをやの声であります。

その声に対して、どういう受け方をしたのか——まあ十人は無理やけど、まあできるだけやってみましょう——まあ十人は無理やから、三人はしましょう——到底できるとは思えないけれども、をやの声やから何でもどうでもさせて貰いますというつとめてきたのか——今日までの歩み・心使いを改めて振り返っていただきたい。

教会長さん始めよ、ふぶくの皆さん方にも、同じ声は聞いて頂きました——一教会十名、ようし私から十名出すためには、私が何名出させて頂こう——それならこの人も何名、ようし、さあ、みんな何でもどうでもやらして貰いましょう——と、果たして何処までをやの思いを受ける心で今日まで歩んで来たのか、改めて思案していただきたい。

そして、実はここに、親神様の御守護が現われてくる理が大きく変わってくるものがあり、私たちの親神様の御守護に対するありがたさに違いが出てくるのであります。

●年祭の年をどのように受け止めたか

本当にまるまる受けて今日まで歩んで来たかど

うか、成っても成らないでも、この一年は、何でもどうでもおぢば帰りをさせて頂きます、一人でも多くの人におぢば帰りをして頂きますといつて、通り切つて来たかどうか。

一つの種にも、成つて来るのは、全て私たちの受け方一つだということを変更して思案して、もし年祭の今年一年の今日までの心使い・歩みが、二分の一だったり、三分の一だったり、できるだけだったたり、したならば、改めて思案して、あと二ヶ月余り、何でもどうでもという心で、まるまる受けてつとめられたら、今からでも決して遅くはありません。

人ができるできないという問題ではなく、受けさえすれば親神様・教祖が必ずはたらくてくださり、受け方が下手だったら、願うてもなかなか難しいのです。どうぞ、残された二ヶ月余りしっかりとその理を受けて歩みましょう。



●次の塚に向かつて

そして、次の塚に向かつての歩み出しの句であります。次の塚に向かつて句々におぢばから声を掛けて頂くはずであります。

その時に、「半分なら受けます。いや、今都合悪いから後にしてください」と言ったのでは、せっかくの成人の句をまた自分自身が遅らせてしまうことになりかねません。

そこに親神様の大きな御守護があるのなら、句々のをやの声というものは、まるまる受けさせて貰うという心をしっかりとつuckingていかなければ、私たちの次の塚に向かつての本当の成人はありません。

そこが先ず基本ではないでしょうか。

先ず、今年一年の今日までのをやの声に対する受け方はどうであったか、改めて思案すると同時に、次の塚に向かつての大事な角目として、しっかりとをやの声・をやの思いをまるまる受けつとめ切らせて頂く、そのことを心において頂きたいと思ひます。

●「理の親」の受ける立場を忘れぬように

最後に、「理の親」ということについて注意するなら、あくまで私たちは子どもであります。をやの理を受ける者であります。理の親だからといって、親になってしまったら事情が起こります。

幾ら理の子ができて、理の親と言われるようになって、子の立場・子の心というものを失って自分が親に成り切ってしまったら、これは事情になります。親神様・教祖のおはたらきはなくなってしまう。

私たちはいつまでも、どういう立場を与えて頂いても、子の立場に受ける立場であるということをお忘れはいけません。これは私も含めてみなさん方も十分に注意すべきことなので、敢えて言葉を添えさせて頂きます。

年限が経って、代が変わつて来ると、ついつい「これがうちのやり方なんだ」となってしまう、をやの声を聞くのを忘れてしまつて、それぞれが親になってしまい、事情が起こつて来るといふことも現実にありますから、どんな立場にあつても子であるということ、常にをやの理を受ける立場であるということは決して忘れないように、共々に受ける立場として、しっかりとをやの理を受けて、これから成人の道を歩ませて頂きたいと思ひます。

どうぞ、みなさん、これから勇んでつとめさせて頂きましょう。受けさえすれば、はたらくてくたさいます。しっかりとらいて貰いましょう。どうぞよろしく願ひします。 <<以上要約>>

談話室



教祖年祭の思い出 その五

神村分教会前会長 下田 輝夫

教祖百年祭には東西礼拝場のふしんが打出され、西礼拝場が先に完成し次に東礼拝場が出来上がった事は、皆様御承知の通りです。

この東西礼拝場の普請につきましては、余りひのきしんに参加させて頂いた事はありませんが両方とも二日間の直属特別ひのきしん隊で参加させて頂きました。

西礼拝場の場合は内部の工事は殆ど完成し外部では大屋根の棟の瓦葺きが残っているだけと云う時で、内部の片付けが主な作業でした。この時私の悪い虫が動き出して、休憩時間に大屋根に上がって屋根の上から、あちこちと色々写真を撮ってやろう、いや撮らせて頂こうと思い、昼食もそこ〜にカメラを持って大屋根に上がり棟の足場から、教祖殿や北礼拝場、神殿、東のやかた等々、西礼拝場の棟から写したその景色は、二度と写す事の出来ない場所からのもの、そう考えますと実に価値ある物となるナーと、そんな事を思い乍ら

撮らせて頂きました。写している所を御本部の先生方に見られたらお叱りを受けるのではないかと、内心ビク〜し乍ら撮りましたが誰からもどこからも、お叱りも注意も受ける事なく写す事が出来ました。この時期何の為かわかりませんが、南礼拝場の大屋根に棟まで上れる様に、西の端に近い北側に足場が作ってありました。それを見た時俄に好奇心が湧いてきて、ヨシあの上まで上がって見ようと思い、見つかったら叱られるかも知れないと、内心ビク〜し乍ら思い切って上って見ました。南礼拝場の棟からも西礼拝場を写したり神殿や東のやかた等何枚か写しましたがこれも二度と写す事の出来ない場所からのものとなりました。南礼拝場の棟の瓦の高さ誰もが気になる所ではないかと思いますが、一米五十糎位かなと思います。私の身長が当時百五十七糎でしたが私の身長より少し低い位でしたので、百五十糎位と考えて間違いない様に思います。幸いこの時も誰からもどこからも、お叱りも注意も受ける事なく、無事に降りる事が出来ました。後から考えてみて、如何に物好きとは云え、よくも南礼拝場の大屋根の棟まで上ったものと、我乍ら感心して居ます。カメラを持つと、生涯に二度と同じ場所から写す事が出来ない。そんな所から写真を撮ると云う事は、何とも云へない気分の良いものだと思います。西礼拝場普請のひのきしんでは短い期間でしたが、思いがけないこうした思い出が出来ました。

東礼拝場も同じ様に二日間のひのきしんに参加させて頂きました。この時は内部工事の最中でしたので、材料の調達が主な作業でした。大きな角材をプレーナーで削るのに一辺を一糎以上も削り込むのを見た時、普通なら二〜三度削ったら終わりなのに、勿体ないナーと思う程、削った上にも削り、こうする事によって木に艶が出ると聞き、成程と思いました。大きな材木を念には念を入れて仕上げてゆく作業に、さすが御本部の普請は違うと心から感心した思い出があります。

この時も休憩時間を待ちかねて、完成したら見る事が出来なくなる蔭の部分？を色々撮らせて頂きました。

カメラ狂も困ったものですが、東西礼拝場のひのきしんでは、期間は短い中に色々思い出に残るものが出来ました。色々写した写真は公用する事なく、大切に保存して居ます。



今からが御恩報じの道

弓ヶ濱分教会長 森川 弘 志

去る九月二十六日、真柱様より弓ヶ濱分教会長の理のお許しを戴き、十月二十九日、上級米府分教会長様ご夫妻の参拝をいただき、六代会長就任奉告祭を執り行なうことができましたことは、誠にもったいなく、嬉しい限りであります。

今は至らぬ私ではございますが、更に心を研きたすけ一条のひながたをめどうにつとめきり、教会に繋がる用木、信者一同と共に心を合わせ、前進させていきたいと存じます。

顧みますと、教会で生まれ、教会で育った私は男三人、女四人の七人兄弟の五番目、三男であります。一番目の長女は七歳で病死、私が十二歳の時、三代会長である父が四十三歳で病死した頃から、次女、次男が相次いで家出、直ぐに母が四代会長のお許しを戴くべく、修養科を志願して講習まで終わって自教会に帰って来た頃には、長男も家出の後でありました。

小六の私、小三の妹、五歳の妹を抱えた母は、その後、教会の御用を最優先にして、愚痴をこぼすことなく、黙々と私たちを育ててくれました。私は、身体が丈夫ではありませんでしたが、中学一年になってから高校を卒業するまでの六年

間、毎日欠かすことなく牛乳配達のパイトを続けることが出来ました。その頃はまだ、親神様のご守護により無事にお連れ通りいただいたなどと、考えたこともありませんでした。

高校卒業後は、地元の製紙会社に就職し、給料はいつも全額母に没収されておりました。

入社五年後の二十四歳の時、東京本社勤務を命ぜられ、後ろ髪を引かれる思いで、故郷米子を後にしました。給料の半分は毎月欠かさず送金したのは言うまでもありません。

その後、私が再び米子工場勤務を命ぜられたのが三十四歳の春でした。三十歳の秋、縁あって職場結婚したのが、家内(前会長)であります。二歳

誕生日前の長女を連れて、米子の人となった時、母は涙して喜んでくれました。以来定年退職する平成十七年四月誕生日まで、通算四十一年間の会社生活を無事に過ごさせていただきました。

詳細は省きますが、頼まれたことは嫌とはいえない性格が幸いし、中学、高校、社会人、どの時代を取って見ても、良かった、楽しかった、満足した、と言う思いしか残っていません。中でも、自教会の月次祭はもち

ろんのこと、上級教会の月次祭にも、会社に無理を言って休暇をいただき、つとめを果たすことができたのは、親神様のご守護にほかならないと心から感謝している次第でございます。(今や月に二日の有休が許される会社はないとおもいます
が・・・)

さて、自教会の設立は大正三年に始まり、私の祖父が二代会長、父が三代、母が四代、家内が五代と代替わりし、今年九十二年を数えます。

四代会長であった母は、兄弟姉妹の上三人が、お道を嫌って家を出て、残された私と妹二人だけとなり、残念であったに違いありません。その上、故郷を離れてしまつて、いつ帰ってくるのか分からない三男の行く末を憂いても、口には出さず

じっと我慢していたことは、私も身にしみて感じていました。私が別席をはこぶようになったのは、二十九歳のときでした。いろいろと事情をお見せいただいていたときでしたので、母の言葉で素直に初席から満席まで順序よくはこび、おさづけを拝戴したのが、三十歳の五月でした。教会の後継者を意識しはじめたのもこの頃からだったと思います。(初席をはこんだ頃から良縁が舞い込んだと言つて



秋季大祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に会長上原理一慎んで申し上げます

親神様には「月日にわにんけんはじめかけたのわよふきゆさんがみたいゆへから」と紋型無いところから道具を寄せ承知をさせてこの世をお創造になったばかりか人々の陽気ぐらしとかけ離れてゆく状を御覧になるや旬刻限の到来を待つてこの世の表にお現れになり教祖を月日の社とお定めになるやだめの御教えをお説き下さると共に陽気ぐらしに向かうひながたをお示し下さいましてこの世界だすけの道をおつけ下さいました事は誠に有難く勿体ない極みでございます 私共はよふぼくとの自覚の元日々は朝夕にかしものかりものの理に御礼申し上げると共にこの道世界に広めようとつとめとさづけを通してたすけ一条の御用の上に勤め励ませて頂いております

そんな中今月二十六日は立教の元一日に当たり本部では秋の大祭が執り行われますので当教会でも理のお許しを戴いて今日の吉日におつとめ奉仕者一同喜び心も一入に明るく陽気に勇んで座りづとめてをどりをつとめて秋の大祭を執り行なわせて頂きます 御前には今日の日を楽しみに寄り集いました道の子供達が共に声高らかにお歌を唱和し同じ思いに伏し拜む状を御覧下さいまして親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます

さて教祖百二十年祭もいよく仕上げの句を迎えました 「一年間を通しておぢばを賑やかにしよう」と申し合わせ今日まで歩んでまいりましたところ帰参者数が千人を越える月もあり届かぬ月もありましたが数もさることながら不思議な救かりや御守護を感じるおぢば帰りの姿をお見せ頂く等本当に結構にお連れ通り頂いております 残された月日尚一層御守護に浴す事が出来るよう精一杯つとめさせて頂きます 又今世上は他国に誘発されて日本でも核武装の議論がなされる等より混迷を深めております 第二次世界大戦後体制の違いはあれどもどちらの国も国民の為のものであったはずが今や少しそれと違って思うように思われず 改めて原点に戻る事の大切さを思う時私達お道の者も改めて立教の元一日を思索し旬にお掛け頂く親の声を受けてこそ親神様にお働き頂けるといふ事を心に刻み次の塚に向かつての成人の歩みの指針をさせて頂く覚悟でございます

何卒親神様には世界一列救けたいとの親の思いに出来るべく成人の歩みを進める皆の真実誠の心をお受け取り下さいまして万たすけの上に更なる自由の御守護を賜り人々が一列兄弟の理に目覚めすようお導きの程を一同と共に慎んでお願い申し上げます

も過言ではありません

昨年還暦を迎え、時の流れに沿って、修養科、教会長資格検定講習(前期・後期)、そして今年教会長任命講習へと、脇目も振らず通らせていただきました。この意義深い、教祖百二十年祭の年に、大勢の教友と共に、教会長の理のお許しを戴けたことは、私にとってこの上無い喜びであります。今私に課せられた課題は「教会内容の充実」であります。用木として、今まで出来なかったこと、しなかったことなど、道の信仰者の使命として、にをいがけ、おたすけに励ませていただくことです。「これからは、御恩報じの道」であると思っております。決して若いとは言えないこの年ですが、意気込みだけは持ち続けて行きたいのです

このたび、会長の任命を戴いた直後から、私の孫(長女の長男三歳七ヶ月)が、会長さん、会長さんと呼んでくれるようになりました。私が、時々、おじいちゃんね・・・と言うと、「おじいちゃんじゃないでしょう、会長さんでしょう」などと、今からプレッシャーをかけられている気がするの、気のせいでしょうか？



天理時報

第3回 エイズ 性の原点に思案を



立教156年4月4日号

天理大学教授 上原豊明

三月中旬、米国下院で、エイズに感染している外国人の移民禁止が三五六対五八で支持された。もちろん移民に限ってのもので、一時的に米国を訪問する者には適用されない。

エイズ感染者が移民し、発病した場合、年間一人十萬ドル(約千二百萬円)の費用がかかるという。下院のこの評決に対する支持者は多い模様。クリントン大統領がこれをどうするかは決まっていないが、米国のエイズ問題はここまで来たか、との感を強くした。

エイズは、日本語では後天性免疫不全症候群。免疫機構が破壊される病気で、十四世紀にヨーロッパで猛威をふるったペストに匹敵する、いやそれ以上に厄介な病気だとされている。

この病気がはつきりした形で社会問題となったのは、サンフランシスコでの同性愛者の発病から。初め同性交渉によるものと思われたが、やがて輸血や異性間交渉によるものが激増。血液、体液(特に精液、膣へちつゝ分泌液)を媒介として性器の粘膜や皮膚の傷口から伝染すること、妊娠・出産に伴う母子感染が確認された。

国連の対エイズ・グローバル・プログラムの報告では、過去十年間に北アメリカ、アフリカ、ヨーロッパで広がったのと同様に、現在はアジアおよ

びラテンアメリカに広がっており、感染者千三百萬人中、九〇パーセントが発展途上国の人々だという。また、発病した二百五十萬人のうち、二百萬人は既に死亡。今世紀の終わりには三千万から四千万の人が感染するであろうと予測している。深刻なのは、二十歳から四十歳代という前途ある年代に感染者が多いこと。平均八年から十年で発病し、発病者の死亡確率はほぼ一〇〇パーセントだという。

製薬産業では、既に五十億から六十億ドルの資金を研究に注いでいるが、この十年間では薬剤による解決は不可能と、非常に悲観的である。したがって現在残されているのは、予防。特に性に対する行動変化のみが、取り得る糸口であろうといわれる。

ところが、恐るべき病気である反面、正しい知識を持ち、感染経路を熟知しておけば被害は十分に避け得る。すなわち、通常のキスや咳(せき)、回し飲み、便器、プール、握手などでは感染しない。感染者との同居や職場で共に仕事をして問題はない。

問題は先に挙げた血液、体液、母子感染である。輸血用血液は、医学的取り組みがなされ始めているので置くとして、これ以外の感染に陥る行為をとらないことが大切。その意味で、エイズに関する知識の一般への普及が先決だ。麻薬や性の問題

も含め、できるなら子供のうちから教育しておくことだと思ふ。

ここで、お道の人間として、これをどう考えるべきかと自問した。一番に心に浮かんだのは、「元初まりの話」に示された人間創造の目的。人間創造の原点において親神は、人間の陽気ぐらしするのを見て、共に楽しみたい」と仰せられたではないか。罪と罰の思想は本教にはないが、エイズのような病気を喚起した人間の心遣いに思いを致すべきではないか。

性をめぐる問題は古今東西を通して、人間の「善」と「悪」との岐路にある。親神から与えられた性を、子々孫々に続けていく神聖なる生殖から離反し、瞬時の自己中心的快楽に向けたことが人間の生存を脅かすものに連なっている事実を目



を向けるべきだろう。一方で、感染者・発病者に対しては、何も恐れることなく、同じ親神の子としての個人の尊厳を踏まえて接したい。へようぼく」としての温かい愛情を持つことは当然であろう。

親神から授けられた叡知(えいち)でもって、人類はいつか必ずやエイズの

解決策を見いだす。現時点では、予防策を進めることも大切だろう。と同時に、人間創造の原点に連なっていく「性」のあり方に、これを機にもう一度深い思索をなしてはどうだろうか。その思索を深めることが、へにをいがけ・おたすけを進めていく上に、一つの実りをもたらすものと思う。

こころの詩

東悠分教会前会長夫人 田林 美智子

秋風に蓄ふくらむ 野ぼたん^{あした}に

懸命なれと 声きく朝

秋風に誘われて 訪う師の庭に

白く芙蓉の 咲きて優しき

ご大祭 つとめ終えたる 更衣室

紋服た、み秋は更け行く

少年会研修員 第25期生募集

- 【出願期日】 平成18年10月26日～平成19年2月26日
- 【研修期間】 平成19年3月～平成20年3月
- 【出願資格】 ・団長が推薦し、団育成会長が認めた者
・よふぼく(研修期間中におさづけの理を挿載する者も可)
- 【選考方向】 「少年会と私」のレポートと面接

大教会年末大掃除

- 【日時】 12月22日、9:00より
- *一人でも多くの方のご参加をお願いいたします。

詰所餅つきひのきしん

- 【日時】 12月26日(火) 13:00より
- 27日(水) 7:00より

・原・稿・募・集・

内 容

①小随筆 ②教会・布教所の独自の活動の紹介
③俳句・和歌・川柳 ④教会行事開催後の報告記事 等々

字 数

1000字前後(800字~1200字)

題名・所属教会名・氏名を明記して下さい。

俳句等は1句からでも結構です。

寄 稿 先

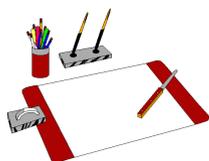
下記、大教会内『かさおか』編集掛宛ドシドシご寄稿下さい。

郵 便：〒714-0066 岡山県笠岡市用之江377

F A X：0865-66-1314

メール：**tenkasa@kcv.ne.jp**

尚、原稿はお返し致しませんので、予めご了承下さい。



大教会だより

Ⅱ 教会指令 Ⅱ

◎任命・移転建築願

福富士 分教会

*前任

*新任

畑 敏男

藤 井 正 仁

*移転元

広島県福山市山手町三三四二一

*移転先

広島県福山市神辺町川南二八八九一



◎教会長資格検定講習会修了者

後期 立教169年10月19日終講

宇津戸 豊田 カツ

宇津戸 井上 トミコ



教祖年祭の年も残すところあと一ヶ月余りとなった今日、以前からいろんな所から年祭にお見せ下さる節(おはたらき)

を見聞きして、自分は…と鑑みていたが、十月、期漏れずして、旬を逃しかねない自分の日々の通り方に、遅ればせながら節としてお見せ下された。大節であった。

「現れ出る事象は心通り、神の守護は千に一つも違う事なし。」とお聞かせ頂くが、実際に大節に接して、現れ来る事情の姿から、誠に自分にとって年祭の年に相応しい、これしかない時句を、心通りにお与え頂いたものだと感じ、今更ながら反省とも後悔ともとれる、定めた心から程遠い踏ん切りのつかぬ心と行ないが見えてくる。改めて、年祭に蒔かねばならぬと決めた事は、地道に通り切らせて頂く事が如何に大切なことなのか実感させて頂いた。こう思うのも節あつての事なのかと、情けなくもあり、ありがたい。

その中からでも、「節から芽が出る」とお聞かせ頂く如く、残り僅かとなった今教祖年祭をこれまでとは違う自分の生き節として、僅かでも活かして行きたいと切に願うと同時に、出来ぬであろうと流していた事が、結果、別の意味でこの節を乗り越える転機になるう事もお見せ頂いている。ちばへ…心をつなぎたい。(ちよん)